| 平成 30 年度　第５回　習志野市学校施設再生計画（第２期計画）検討専門委員会 | |
|---|---|
| 開催日時 | 平成 31 年３月 15 日（金）15：00～17：00 |
| 場　所 | 市庁舎　３階　大会議室Ａ・Ｂ |
| 出席者 | ［委員］<br>長澤委員長、伊坂副委員長、倉斗委員、西尾委員、櫻井委員、鈴木委員、三代川委員、佐々木委員、齋藤委員、川崎委員<br>［事務局］<br>櫻井学校教育部長、府馬習志野高校事務長、塩川学校教育部副技監、三角教育総務課長、村山学校教育部主幹、高田学校教育部主幹、吉川学校教育部主幹、金子管理主事 |
| 議　事 | （１）習志野市学校施設再生計画（第２期計画）策定に関する提言書（案）について<br>（２）その他 |

傍聴者：６名

【次　第】

１．開会

（１）委員長挨拶

２．議事

（１）習志野市学校施設再生計画（第２期計画）策定に関する提言書（案）について

（２）その他

３．報告

４．閉会

開会

委員長挨拶

委　員　長　　習志野市学校施設再生計画（第２期計画）検討専門委員会　第５回を開催する。

本日は、「習志野市学校施設再生計画（第２期計画）策定に関する提言書（案）」について審議いただく。この場で検討するのは最終回となるので、これまでの４回の議論を踏まえて、それぞれの記述について気づいたところの意見をいただき、この委員会としての考え方を確認したい。

議事

委　員　長　　本会議については、習志野市学校施設再生計画（第２期計画）検討専門委員会設置要綱第５条第２項の規定により委員の過半数の出席が成立要件となっている。ただいまの出席委員は９名であるので、本会議は成立している。

会議録署名委員の指名について諮る。会議録の作成後、最終的な確認をすることになっているが、名簿順に、西尾委員、櫻井委員を指名したい。

委　　員　　異議なし。

委　員　長　　それでは、両名にお願いする。

**議事１　習志野市学校施設再生計画（第２期計画）策定に関する提言書（案）について**
**（資料に基づき、事務局より説明）**

事　務　局　【資料説明】

それでは、議事１『習志野市学校施設再生計画（第２期計画）策定に関する提言書（案）』について、資料に基づき説明する。

提言書の構成について「はじめに」の部分は、提言の前段として、①習志野市の学校施設の現状と課題、②習志野市の教育の目指す姿を述べた後に、③提言と入っていく。

提言の部分は、大きな項目として４点掲げた中でそれぞれの項目について、個々の提言となるものを示している。

提言の１点目「習志野市の教育の目指す姿を実現するための学校施設の整備について」、２点目「習志野市における今後の学校施設のあり方について」、３点目「習志野市学校施設再生計画（第２期計画）の策定に際しての留意事項について」、４点目「習志野市学校施設再生計画（第２期計画）の進行管理について」の以上である。

「はじめに」の「１．習志野市の学校施設の現状と課題」としては、今までの会議の中の資料で示した内容となるが、公共施設の総延床面積のうち、学校施設が約６割を占めており、市の公共施設マネジメントにおいて、教育施設をどのように再生していくかが非常に重要であることを示している。

２ページでは、国における長寿命化改築の時期としている築 40 年以上の建物が、51%を占めており、習志野市における学校施設の老朽化が進んでいる状況を示している。

次に、下段の小学校の学級数の推移としては、当初、市全体の人口推計をもとに、学校の児童・生徒数を推計する予定であったが、現在、市全体の人口推計を取りまとめている状況であり、今回の委員会では示すことができない。

このことから、本提言書においては、「早急に最新の児童・生徒数の推計を実施し、中長期的な学級数の推移を踏まえて、第２期の学校施設再生計画を策定することが必要です。」といった記載としている。

３ページは、以前の会議でも説明しているが、教育委員会が住民基本台帳をもとに行っている「児童・生徒数の推計」を示している。各学校の数値が入った資料については、資料編に記載している。

４ページでは、「第１期計画における学校施設再生の取り組みと課題について」６点抜き出し示している。

５ページは、「今後の維持・更新コスト」を示している。その中で、長寿命化改修を行ったときに、年間費用が過去の施設関連経費の 1.9 倍となるという結果について提示していたが、様々な条件を見直し、1.6 倍として記載している。

６ページは、習志野市教育基本計画の基本目標である「豊かな人間性と優れた創造性を育む習志野の人づくり」をもとに、学校環境整備の基本方針である「安全で潤いのある学校環境整備」を掲げている。その５つの視点を示している。

７ページは、今までいただいた意見をもとに大きく４つに分類し、提言としている。

内容については、前回の資料に加えて、第４回の会議でいただいた意見などをまとめたものとなり、概要での説明とさせていただく。

提言１は、「習志野市の教育の目指す姿を実現するための学校施設の整備について」である。

学校施設は、子どもたちの学習・生活の場であり、充実した教育活動を存分に発揮できる機能的な施設環境を整えるとともに、快適で十分な安全性・防災性・防犯性や衛生的な環境を備えた安全・安心なものでなくてはならない。

そこで、提言の最初に、習志野市の教育の目指す姿を踏まえたうえで、学校施設の方向性についての提言を示した。

内容としては、学校施設整備の方向性として、①柔軟性に富んだ学校施設の整備について、②環境に配慮した学校施設（エコスクール）、ゆとりと潤いのある学校施設の整備について示している。

９ページでは、③安全・安心で質の高い教育環境を実現する学校施設の整備について、④地域との交流・連携に配慮した学校施設の整備について、に関して、それぞれ記載の提言を載せている。

提言２は、「習志野市における今後の学校施設のあり方について」である。

１点目は、「学校施設の適正規模・適正配置に関すること」である。この部分については、各委員より様々な意見をいただいている。

２点目は、「地域と連携し、地域コミュニティの拠点となる学校施設の検討に関すること」である。

学校施設は教育の場であるとともに、地域コミュニティの拠点としての役割、また、災害対策の拠点としての役割について、いくつかの提言をいただいている。

３点目は、「学校施設の複合化・多機能化・共用化に向けた検討に関すること」である。

提言の中では、公共施設の削減を図るだけでなく、学習活動の幅が広がるとともに、児童生徒と地域の多様な世代との交流、学習の場を拠点とした地域コミュニティの強化を目的とした複合化等の検討が必要であるといったことを提言の１つとして記載している。

４点目は、「小中一貫教育等の検討に関すること」である。

この中では、小中一貫教育に関する取り組み方針を検討したうえで、学校施設の整備を進めることが必要であると言った提言を示している。

提言３は、「習志野市学校施設再生計画（第２期計画）の策定に際しての留意事項について」である。

習志野市の学校施設の老朽化の現状から、スピード感を持って、具体的な課題解決の方策を見出していくことが必要であり、また、財政状況が現状のまま推移していく前提では、現在の学校施設規模を維持していこうとした場合、学校施設の改築・改修に係る事業費が捻出できなくなるという厳しい見通しを示した中で、１点目として、「今後の維持・更新コスト試算」に基づく中長期的な計画の策定については、長寿命化の考え方を導入し、事業の平準化を図った計画の策定が求められると言った提言の中で、先送りされたいずれかの時期には改築の必要が出てきて、コスト削減につなが

らないケースがあるので、建設単価などの精査を継続的に実施し、トータルとしのコストの削減を図る必要があるとしている。

また、教育環境面においても、ただ施設を延命化するのではなく、学校の課題にあったものにしていく観点で考えていく必要があるとしている。

２点目として、「第１期計画の実施段階における課題を踏まえた計画策定について」、３点目としては、「学校施設整備水準の検討に関すること」、４点目としては、「余裕教室の有効活用に関すること」、５点目としては、「改修・改築時の学習環境に関すること」６点目としては、「魅力ある市立高校づくり」となっている。

最後に、提言４として、「習志野市学校施設再生計画（第２期計画）の進行管理について」である。

１点目は、「計画の進行管理に関すること」、２点目に、「学校施設再生計画を推進していくうえで継続して協議する事項について」となっている。以上、提言書の内容の説明となる。

次に、資料の２となりますが、今まで提出させていただいた資料から抜粋したものとなっているが、学校施設の改修状況の中で、習志野高校のトイレの状況が記載されていなかった。習志野高校でもトイレが校舎 15 箇所、屋内運動場が 2 箇所あるが、いずれも未改修の状況となっている。この部分については、追記させていただきたい。

主な変更としましては、「長寿命化のイメージ①」に示している。

長寿命化改修を行った 15 年後については、残りの 15 年間を持たす改修として、50 年以前の大規模改修と区別し、費用を抑えています。

また、「長寿命化のイメージ②」は、新たに改築した学校は、耐用年数を 80 年とする改修を行っていくため、40 年目に長寿命化を行うのではなく、大規模改修として考え費用を抑えている。

４ページでは、体育館はＳ造となるが、構造などの要因により「旧耐震基準 45 年⇒ＲＣ造と同じ 60 年」、「新耐震基準 50 年⇒ＲＣ造と同じ 60 年」とした。

次に建築単価は、「改築単価を 450,000 円/㎡から 10%減の 405,000 円/㎡」とし、同様に大規模改修・中規模改修・長寿命化改修を算定している。

そのような変更を行った結果、過去の施設関連経費は、16.6 億円の 1.6 倍となった。

このことから、今後の課題としては、①さらなる経費の削減の検討、②推計をもとにした学校規模の検討による削減、③施設関連経費の増額によるトータルの経費の削減については、第２期の学校施設再生計画において、しっかりと検討していきたいと考えている。

提言にもあるとおり、前例に囚われることなく、新しい発想に立ち、スピード感を持って取り組んでいかなければならないと考えている。以上、説明となる。

委　員　長　　これまでの会議で、実態の資料データと、それを踏まえて考え方や事業の進め方について意見をいただいた内容を「はじめに」と 4 つの「提言事項」という形でまとめている。

特に、スピード感をもって、長寿命化による効果が見えるような進め方が大事、単価についてきちんと検証する必要がある等の意見があり、また建物そのものに入る前段に何を目指すかということを示した上、再生計画という枠組みの中でどのように実

現していくかという、まとめ方の順序が大事であるという意見もあった。それらを反映しての提言（案）になっていると思う。

特に費用については、1.9 倍が 1.6 倍となったが、それでも経常の施設予算を大きく超えているということについて、1.9 倍を 1.6 倍とした筋道や予算的な対応方法などについて、資料３とも見比べながら考え方をまとめる必要がある。

全体について質問、意見があればお願いしたい。

倉斗委員　資料３について、長寿命化改修の時期も、50 年目以降にずらしていて、その後、中規模修繕ということで 80 年まで持たせるイメージで書かれているが、予算的に考えた場合、中規模修繕を行えば足りるという意味で書かれているのか、建物の性能として中規模修繕を行えば 80 年まで持たせられるということか、どのようなイメージで記しているのか。

事　務　局　長寿命化改修を 50 年で行い、次の改修までの 30 年間で考えた中で、長寿命化改修で機能回復、機能向上の工事を行うので、通常行う大規模改修よりも定期点検の結果にもよるが、それほど大きく改修する必要がない中規模修繕としており、費用が見直され、1.6 倍となった要因の一つとなっている。

倉斗委員　今の説明では、建物の性能的に大丈夫であろうと聞こえるが、建物個々の事情もあると思うが、それを基にシミュレーションしていることの信憑性が不安である。

５ページで単価を見直したということで、405,000 円にしているが、サウンディングや、それでいけるという判断はどのような形でしているのか。

事　務　局　これについては、コスト削減を図る中で、何を削れば 10%になるかという試算はできていない。10%削減が図れれば、1.6 倍になると試算しており、それを目指して、何が削減できるかという部分については、内容について精査し、整備計画を策定する中で反映させていきたいと考えている。コストの削減を図るためにどのような手段が必要かということで示している。

倉斗委員　目標値ということか。

事　務　局　10%のコスト削減を目標に、今後、中身の精査をしたい。10%コスト削減は、今後の中身の精査が必要となるが、そのようなところまで踏み込んでいかないと将来的な建物の改築はできないと考えている。

倉斗委員　印象としては、楽観的であると思う。

委　員　長　コスト 10%削減については、45 万円のコストの検証をし、目指す目標を維持しつつ何を軽量化できるかという検討が必要である。単なる数字合わせにならないようにしたい。

西尾委員　提言書の構成や内容については、今までの議論を踏まえて書かれていると思った。

それでも「現状の 1.6 倍のコストがかかる」となっているので、端的に言えば十分ではないということだと思う。表現としては、「前例に囚われない大胆なことを、スピード感をもってやらなければならない」と書かれているが、それを具体的にどのようにするかということをもう一歩踏み込まないと、1.6 倍のままでは「できない計画」であると思わないといけない。その踏み込みをどうするかという議論が必要である。

資料１の６ページで、目指す姿と視点を５つ書いているが、このこと自体の考え方は良いと思う。しかし、書かれている内容については、いずれも「もっとコストをか

けて良いものをつくらないといけない」ということなので、そこが乖離の要因となっている。今の財政状況や施設の状況等を踏まえて、「理想としてはこういう教育を目指したいが、今の制約条件の中でこの視点を活かすとしたら、どのような活かし方があるのか」という観点で書き込まないといけないと思う。

例えば、視点１について、多機能なものを備えていこうとするとコストアップになるので、一つの部屋で色々な機能が実現できるようなものを目指すということや、視点３の環境に配慮したというところでも、環境に配慮した施設を考える中で、光熱水費などのランニングコストが押さえられるような施設にするという観点、視点５であれば、複合化によって地域の交流機能を共有化した効率的な施設にするなど、いかに財政的な制約に対して資するものにするかという観点をさらに追加していく必要があると思う。

今の枠組みの中で、1.6 倍ということで収まっていないが、いかに前例に囚われずに考えていくかということで、個人的に３つ提案したい。

１つ目が、今の状況であると、学校施設を全て維持していくことは無理ではないかと考えている。学校の施設数を減らしていくことを真剣に考えないといけない。ただ、それが教育の機能低下などマイナスのことになってはならないので、教育の質を高める戦略的な統廃合という観点で検討できないか。

２点目が、建築コストが高いということがあったが、習志野市の学校はコンクリート強度が高いという圧縮強度の結果が出ている。これまで良い施設を建ててきており、50 年経っているものでも状態がよいので長寿命化の対象になるという考え方に一致してくると思う。ただし、逆にこれだけ厳しい状況になると、よいもので大きなものをつくるというよりも、お金をかけずに短期的に対応していく。端的に言うと、プレハブ校舎の活用ができないかと考えている。仮設校舎としてプレハブ校舎を建てるのではなく、本設としてプレハブを活用する。プレハブでも良いものは 60 年持つといわれているようなので、プレハブを活用することによって、安全かつお金をかけずに対応できる可能性があるのではないか。

３点目は、財政的にお金が足りないという状況なので、別の資金の手当てを考える必要があるのではないか。京都市では、学校のＰＦＩ等も進んでいる。なぜかというと、京都は、昔からの文化で、自分たちの学校を自分たちでお金を出し合ってつくる文化があるようである。かまど金といわれている。「自分たちの学校」という意識が強いため、その学校をどうするかということについて、市民の話し合いが進んでいるという話を聞いたことがある。学校を維持・更新していくために、市民からの寄付や基金、コミュニティファンドを起ち上げるなどを検討してみてはどうかと思う。

委　員　長　　３点、積極的で思い切った提案をいただいた。それぞれに大きなテーマなので、どのように書くか、内容について議論が必要と思う。学校施設を維持することが難しい状況に対して、学校だけで考えると統合することしか手段が残らない。公共施設全体で、どのように地域を支えていく体制をつくるか。その中で学校施設の役割をどのように位置づけるか考えることが大切である。また、学校施設整備には経常予算の 1.6 倍必要という試算を踏まえ、市の施策全体との関係のなかで、学校施設整備予算を見直していただくことに本報告書の提言が活かされていくと良いと思う。

櫻井委員　視点を上げていただいて、それに則って提言をしていくという流れはわかりやすい。私達が何度か話し合いを重ねていく中で、構成が具体的に書かれていてありがたいと思った。

提言に書かれていることは、新しくやろうとしていることではなく、今まで習志野市が子どもたちの教育としてやってきたことが踏襲され、今後の新しい教育のあり方など、全て書かれていて、何ページにもなっているのだと思う。従って、視点から提言にいくまでの、提言の中を並列的に考えるのではなく、今後のことを考えて特に一部分を協調するなどの提案の仕方などがあれば、内容的な位置づけがより解りやすいのではないか。

伊坂副委員長　全体の印象で、４回議論した中で、非常に良く整えられていて、これに基づいて、行政として計画をつくり、市議会や市民に対して説明していくと思うが、そのための基本的な資料としてはよく整っている印象を受けた。

はじめから読んでいると、提言１、２を読んでいる間は前向きな明るい気持ちになるが、提言３になると絶望的な気持ちになってしまう。提言３は、実態として考えざるを得ないことは多々あると思う。将来的に可能かわからないが、企業とタイアップして校舎を建てられないのかということも思った。

手を加えることが可能ならば、提言４が、進行管理のところが薄い感じがした。一般的な話に留まっている。

一つは、教育については、国全体の方針や基本的な構造は、40～50 年先は全く予想がつかない。簡単な例でいうと、全教室にエアコンを付けることに対して補助金を出すということは、数年前は想像もできなかったことである。今回は出ていないが、幼稚園が認定こども園になっていることなども同様である。最近のことでは、2020 年までに小中学生全員がタブレットパソコンを持てるようにという話が出ていて、経済情勢を考えた時、厳しい状況になっており、数年前は全く想像していなかったことである。

１点目としては、今後、教育の方向性や環境変化が大きなレベルで起きたときには、第２期計画の見直しを行うことを明記すべきである。必要があれば対応するではなく、環境の変化があったらやるとする必要がある。

２点目は、今後の小中学校の適正化の検討があった場合、それに伴って見直さなければならないと明記すべきである。その際、諮問委員会を構成するかどうかは判断になると思うが、この２点は、10 年、20 年という長いスパンではないと思うので、次の再生計画は直ちに見直す必要が出てくると思う。

全体的な経済状況が良くなれば、教育に人もお金もかけていただき、充実させてもらえれば良いと思う。

川崎委員　このような会議に携わり、子どもたちが育つ環境をどのような人達が考えてつくっているかということが良くわかる会議であった。習志野市でも、こどもが増えていく場所と減っている場所によって、同じ時期に学校や公共施設を作っていたので、目に見える老朽化を保護者や地域も気にしているので、その点でこのような取り組みをしているということがよくわかってきた。習志野市は財政難であるということを皆言っているので、その財政の中で、どのように再生・維持していくのかということは気に

していることなので、１期計画で残っていたことを、２期計画でどのようにしていくのか気にしている方もいる。時代や環境によって、やり方を変えていかないと、専門家の方達の意見を聞いてより良い方向にいくための提言書を作っていると思っている。提言書ができてから計画を立てて行くので、専門の方達と考えてやっていけたら良いと思っている。

齋藤委員　息子は、船橋市の三山小学校から三年生の時に転校してきた。20 年前、三山小学校では、学級数が減ったことにより、校舎の一部をデイサービスに変えた。松戸市では、マンション群の中にある学校は、建てた時から将来、高齢者施設にすることを計算して設計したと聞いている。高齢者施設に変わっているかはわからないが、学級数が極端に減った場合を考えて動いているところがあるが、習志野市の場合、今後、横ばいというところがほとんどで、児童数が少なくなっている海側の学校でも横ばいとなっている。今後横ばいなのであれば、地域の拠点である小学校を存続させていくかと言うことが一番の課題であると思う。転換させるということよりも、継続させていくことの方が課題ではないか。向山小学校は、全校をあげて鹿野山セカンドスクールへ行くなど、小規模校独特の授業展開、学校運営を図っていると聞いている。中規模校に見劣りするのではなく、各学年が結束して活き活きと勉強しているという姿を習志野市は知っていると思うので、児童数が減ったからということをマイナスに捉えず、小規模校ならではの授業展開ができるような、それに伴う施設の維持につながってくると思うが、14 ページにある、余裕教室の有効活用のところで、余裕教室があることはいけないと捉えられるので、余裕教室こそ子どもたちの教育のために活かせる場であるということを念頭に、学校施設がもっと良くなればと思うが、問題は資金源であると考えると悩ましいところである。発想をがらっと変えたことを、市も考えてもらわないといけないのではないかと思った。

佐々木委員　５回にわたって議論し、その都度丁寧な資料を作成していただき、解りやすく、議論のし甲斐があった。

資料２「トイレの改修」について、習志野高校が抜けていたということで、進捗が０であるということだが、高校が抜けるということは考えられないがどういうことか。

事　務　局　トイレ改修の資料は、小中学校の整備ということで取り組んでいた資料として作成しているため、習志野高校が抜けてしまった。

佐々木委員　第１期計画、第２期計画とも、学校施設再生計画ということで、高校を含めて検討していく中で、高校について載っていないので疎外感を感じる。トイレ改修を優先事項とし提言に入れてもらいたいということと、高校については頭の中に入れて計画づくりをしてもらいたい。

全体的なことでは、思い切ったことをやっていかないといけないと思う。選択と集中であると思う。どのように突き進んでいくかということに限られていると思う。選択については、文科省からの適正規模、適正配置というところで、その適正規模に対して習志野市は独自のことがあれば、方向転換しやすいと思う。そのような基準を作ることもこの計画の中では大事なことであると思う。集中については、統廃合するときに丁寧な説明ができないと、総論として仕方ないと考えているが、各論となると異論を唱える人が出てくるので、事前の説明が大事である。事前説明するには、市独自

の基準があるとやりやすくなると思うので、そのような観点で計画に盛り込んでいただければと思う。

三代川委員　習志野市は、住みやすい駅ランキングで津田沼が上位に上がるなど、人気のあるまちではあると思うが、奏の杜に見るように、人口爆発して小学校がパンクするなど、計画のズレがあると思うが、茂原などでは４つの小学校を一つにしてしまうなどということは、これ以上人口が増える見込みがないからということになる。袖ヶ浦であるとＵＲが直せば人口が増える、鷺沼には畑がたくさんあるが、再開発された場合、鷺沼小学校に人が入らなくなってしまうなど、難しい課題を抱えていると思う。予算の部分で考えると、住民税や固定資産税が上がることがあると思うので、子どもの世代にお金をかけるように予算組みをしていただきたいと思う。

鈴木委員　習志野市の現状が、昔より厳しいと感じている。適正配置、適正規模でということは、学校が 40 年、50 年経っているということは、その頃は適正配置、適正規模なものを作ったという気がしている。海側は生徒数が減ってきて、空き教室がたくさんある。真中の津田沼、鷺沼、藤崎は増えている。東習志野の方は現状維持とみている。

その中で、地域の拠点となる点から見ると、削減して中長期、50 年を 80 年に延ばす施設にするということ、10%削減ということは質を落としてくることと思った。

10%落ちた施設が、あと 30 年もつのかという疑問を持った。地域の小中学校が災害拠点になっているが、教室が空いているということであれば使えると思うので、幅広く災害拠点を見た方が良いと思った。

学校は何だろうという思いがある。学校組織は、市民を受け入れているようで、受け入れられないところ。子どもたちは入ってきて良いが、地域の人には入ってきてほしくないと感じている。秋津のように地域も一緒にやっているところも見ているが、市内の７割、８割は地域の人が自由に活用できないところと思っている。そのようなところも、今後、拠点という意味を含めて考えていただきたいと思っている。提言書を見ると、我々が思っていることが書かれているが、言葉的には表現がやさしくなっていると思う。もう少し踏み込んだ言い方でも良いと思う。

委　員　長　各委員から感想をいただいた。これを踏まえてどう提言を書いていくかという議論に入りたい。

倉斗委員　他の委員が言っているように、視点をまとめているのは導入部分としては良い。

「環境に配慮した」や「安心安全」と言ったような視点がある中で、長寿命化という方法を取っていくのかというところが疑問である。

個別施設計画イコール長寿命化なのかということが疑問に思っているところで、今の予算の 1.6 倍必要であるという書き方は、不足しているということであり、その辺りが和らいで伝わっていると思う。1.6 倍必要であると言うことに対する策はどこに出てくるのかと思ってしまう。提言４の進行管理のところに書かれるべきであると思っていて、どのように資金を調達するのかということが心配なまま読み終わるのではなく、その術が示されるとか、提言１、２、３と読んでいく中で、何々を決めることが必要ですという文言が多くあるが、それがいつまでに決めないと建物の寿命が来てしまうというリミット感が進行管理のところにあるべきであると感じている。色々なことを決めないといけない、お金がない、このままで仕方ないで終わってしまうと、

建物の寿命は刻一刻と迫ってくるので、それをスピード感だけではなく、いつまでに何を決めなければならないのかというところを、もう少し表現できたら良いと思う。

委　員　長　　２章までは夢膨らみ、３章で現実に立ち戻り、４章でそれではどのように工夫したら良いかという構成になっているところであるが、この委員会として、課題について検討した上で必要な手立てを示すことが、具体化へ向けての提言になると思う。

先ほどの意見で、学校とは何かと言えば、子どもたちの教育の場であるということと、地域の人達の活動を支えたり、安心の拠点となったりするので、そのような拠点として学校をどのようにとらえていくか。ある部分は学校以外の施設が引き受けていくというように、学校を含めた公共施設全体のあり方をどう考えていくかということが大切である。単純に子どもの数が減ったから無くせば良いというのではなく、総合的に地域を支える施設条件という中で学校を捉えていく必要がある。提言の中に、今日出た意見を書き込んで、具体化するときに活かしてもらえるよう、この委員会としての考え方を示せれば良いと思う。

質問であるが、資料３の２ページの長寿命化のイメージ図について、文科省も同じようなイメージ図を描いている。習志野市の場合は、最初に実態の説明であった通り、築 30 年以上が 84%、面積でいうと 90%で、国全体の平均の 30 年経過が 70%という数字に対して経年が進んでいる。これを踏まえて、施設的に手当をする経過年数の時期と、その時点で何をするかということの書き方が変わっている。

長寿命化のイメージ①の図で、20 年、35 年、50 年と書いてあるが、築年数を見ると 35 年以上経過しているものが多い。イメージ①の図は、50 年経ったときに長寿命化を行うという図として見れば良いのか。

事　務　局　　長寿命化のイメージ①について、習志野市においては築 30 年を超えている建物がほとんどであるので、この 20 年等の部分については、今まで行ってきた経過を示したもので、基本的には 50 年に長寿命化を行い、80 年まで延ばすということで見ていただきたい。長寿命化のイメージ②については、建築後 10 年未満及び今後改築する施設ということで、津田沼小学校、現在建築している谷津小学校等を当てはめていただければと思う。今建てている施設については、大規模改修を 20 年、40 年、60 年と入れていくことで、80 年までもたせるとしている。

委　員　長　　シミュレーションするということでは、費用的にどれだけ効果があるかわからないが、例えば 50 年で長寿命化し、長寿命化したものは 70 年使って改築することとし、その間の 65 年目の中規模改修はカットするなど、そのような整備方法を学校を混ぜていくことで平準化していくことも考えられるのではないか。それにより 80 年で改築するまでの間に一回手を入れる費用を節約することができる。30 年、40 年以上経過したものについては、イメージ①だけではない取り扱いがあるのではないか。１パターンだけでなく、２パターンを組み合わせていくことも、各学校の施設の状況を見ながら判断する余地があると思われる。

一方で、長寿命化イメージ②の方は、20 年、40 年、60 年と同じような図である。40 年後はなかなか予測しづらいが、今建てるものの水準に戻すだけではなく、その時代に応えなければならない課題があるかもしれないので、そのためには現状の水準より上へ矢印を突き抜けさせる必要があるだろう。それによって、その時代の目標に応

え、教育の場、地域の中心の場としての役割が果たせるということも書いておけると良い。特に前段については、そのようなパターンも含めたシミュレーションを組み合わせてみてほしい。今回の提言で示すタイプとは別の可能性も工夫するということを明記していただけたらと思う。

単価についての議論があったが、余裕教室がある学校については、地域の視点で、あるいは新しい学習活動に応える空間として余裕教室を活用するという観点がある。また改築の場合は、必要面積について教室を多機能に使えるような施設の考え方というのも計画面積を減らす工夫として必要だと思う。学校だけではなく、地域の施設と合わせてトータルな面積をコントロールするという話があった。それによって教育機能が落ちるということではなく、学校運営を絡めることにより可能性を考える必要がある。それによりこれまでの経常予算の 1.6 倍という試算にどう対処するかスタディをしてみないといけない。モデル的な計画をしてみて、今後、再生計画を具体化する検討の中で、市として考えてもらえると良い。

事　務　局　　改築の年数を、80 年と見ているものを 70 年とすることの可能性、そのような部分を含めて、色々な検証を進めた中で整備計画をつくり上げていきたいと思う。

西尾委員　　提言書５ページにコスト試算のグラフが載っているが、1.6 倍かかるということで、40 年の話をしているので、遠い将来の話のような気がするが、2019 年のところを見るとすでに赤い線を越えている。40 年先の話ではなく、来年度からこのような状況になる。本来かけられる予算に対して、やらなければならないことが、改築や大規模改修を合わせるとたくさんあり、予算の範囲内でどれだけやるかということを今から考えないといけない。改築を全て諦めれば大規模改修を賄えるが、改築をやってしまうと大規模改修を先送りすることになる。そのような厳しい判断を毎年毎年していかなければならない。実際の第１期計画で、本来予定していた大規模改修ができずトイレ改修のみの学校がいくつもあったが、今のような判断の中で、先送りしてきたものが第１期計画の中でも積み上がっている状況なので、おそらく第２期の前半には１期で積み残したものをやらなければならないので、1.6 倍よりも厳しい第２期計画になるのではないかと予想している。

そうなると、果たして予算の範囲内で収まる第２期計画が作れるかというと、かなり難しいのではないかという気がしている。ここに表しているような形になってしまうのかと。本来２期計画として計画していることは書かれているが、それは予算の範囲内では収まっていないという計画にならざるを得ないのではないかと考えている。その中で、どのように優先順位を付けていくかということを真剣に議論しないといけない。そのような計画にならざるを得ないということならば、計画を出発点として、全市的な、市民と一緒にどのようにしていくかという議論を真剣にしていく出発点にしていくということを合わせて考えていかなければならないと感じた。

委　員　長　　今回の提言書の意義として、学校施設がこのような状況にあるということを市民に伝える上での資料となり、そのような議論を行う素地を用意するということもあると思う。これからの市の取組の一つとして検討していただきたい。

この委員会としては、学校施設の状況を整理することと、その中で再生計画にどのように、何を大事に認識して臨むかということの取りまとめを行った。施設的な工夫

の仕方について、これとは別に検討の場を作って考えていただけると良いと思う。

面積を減らすということについて、必要な教育機能をカットすることはあり得ない。たとえば規模の小さい学校は運営的に小回りがききやすい。それを前提として、多機能な部屋を作っていくことが考えられるだろう。全部の学校にワンセットの施設は備えるということが今までの学校施設の姿であるが、運営を絡めていうと、ある種の施設は何校かで共用して使い回し、地域の学校、子どもが直接足を運び学ぶ場としてはこれだけは必須とするというようにして、それにより学校施設全体の総量を減らすなど、これこれがワンセット揃ったものが学校施設というものだという考え方を改めることも有効と考えられる。場合によっては、ネットワーク型の学校やＩＣＴを使って学校間のコミュニケーションを図る等、これから 30 年、40 年先を見通すということは、我々が経験してきたのとは違う社会、あるいは社会のもつ技術が違う状況の中で、学校のあり方、子どもの成長の場を考えていくということでもある。ここではそのようなことを検討することが大事であるということまでしか書けないが、今後色々な関係者が集まり、新しい学校像を考えるような場ができることを期待したい。

伊坂委員　再生計画は、大規模改修にしろ、長寿命化にしろ、単に劣化したからそれを直すということだけで良いのかということを感じている。時代に合った、最先端の教育設備をもたらすような改修でないと、安く上げれば良いということではなく、それが大規模改修でどこまで可能なのか、長寿命化の中でどこまで可能なのかということについて議論ができたら良かったと感じている。ＩＣＴの最先端の教室を全教室に作るということはどういうことかの議論ができたら良かった。

１期のトイレの改修でなんとかしたということが良かったのか。

最先端の教育設備を充実させるということが、子どもたちの学力を伸ばしていくことの方が優先だと思っているので、必要であることは十分解るが、第２期が予算的な問題で壁にぶち当たったときに、何を優先するのかという議論はどこでするのか。

齋藤委員　大久保小学校が改築の方向でワークショップが開催されたり、地域の意見を吸い上げようということがなされているようである。大久保地区の公民館、図書館、市民会館などの複合施設を造るにあたっても、ワークショップが行われ、それの発表会があり、今年の秋に開館することに辿り着いたところであるが、５年くらい前にワークショップに参加した。大久保小学校もワークショップ段階から次の段階に入ると、校舎を建て替えるまでに３、４年かかるのではないかと思うと、つぎの学校の老朽化が始まってしまう。提言書の 13 ページにスピード感と書いてあるが、差し迫っている学校があっちにもこっちにという状況なので、２校並行しながら、地域の意見を吸い上げ、設計をしてとか、大規模改修や長寿命化など、並行してやらないとお金がないと言っていられないという状況に差し迫っているので、危機感とスピード感をもって計画を進め、実行に移してもらいたいと思った。

倉斗委員　人が事故に遭うということに不思議がない所まで来ているのではないかという危機感を感じている。そこに通わせている市民の方々の視線という、この提言書もしくはこの事業に関する注目度は、それ以上に強いのではないかと思う。それに対して、一般論的な書き方に見えてしまうようでは、本気でやってくれるのかという不安が拭い去れないと思っている。どうしたら良いのかというところを、本気で考えているとい

う姿勢を見せてほしいと思う。見せるだけでなく、真剣にやっていかないと、危ない校舎になっていくのではないかということもあり、文科省の方も新しい指導要領に沿うような環境づくりのようなことも出てくる。そういった事もどんどんプラス時代にお金がないから先送りということができない時期に来ているので、今までの方法がないのであれば新しいやり方を考えて生み出していく所にも行かないといけないと感じている。

委　員　長　　今の意見に関して言えば、この委員会はこれまで４回重ねてきたが、その間実態をどれだけ把握するかということで事務局に資料を用意して頂き、それを踏まえて習志野市の現状を背景にして、問題をどう捉えていくかと議論してきたと思う。

資料３で、習志野市の特色を踏まえて提言が書かれているという構成になっているので、資料３の内容をもう少し提言書の本文の方に送り込みながら、このようなことをベースにして検討しているというニュアンスが伝わるようにしたいと思う。目標については一般的に大事とされていることが書かれているように見えるが、これも習志野市の教育ビジョンを踏まえて書かれており、単なる作文をしているわけではない。そのことが、手に取った方々に伝わるような構成にすることが課題であると思う。

いずれにしろ一覧表を見ると厳しさが実感される。ほとんどが築後 40 年、50 年であるが、老朽化は放っておくとどんどん成長していくので、スピード感がキーワードとして上がっている。このような実態を踏まえて真剣に考えていく必要があるということが伝わるように、さらに事務局の方で今日の意見、内容を盛り込み、最終の形にしていただけたらと思う。

櫻井委員　　学校は、学校の中の組織だけでは子どもは育てられないので、行政の方があって学校の計画がうまく進み、地域や保護者の方があって子どもたちが育っていく部分なので、学校は子どもたちの教育をするが、地域の方に開放してたくさん入ってきていただきながら、子どもたちの教育に効果的に位置づけていけるとよいと思う。学校は、色々な人達、立場の方々の中で成長していることは、職員達も重々解っているので、色々な場で認識していけるような風を届けたいと感じている。子どもたちの教育のために、施設がいかにあるべきか、難しいコストの部分があるが、脈々と習志野市がやってきた教育の部分を大事にしながらも、今後は、それだけでは立ち行かないと感じた。

委　員　長　　様々な観点からのご意見ありがとうございました。

最後に、提言書の今後の取り扱い方、まとめ方ということであるが、年度末に教育長に提出する予定になっており、残り時間が少ない中で、提言をとりまとめる必要がある。本日の会議で出された意見を踏まえて、事務局で修正・加筆し、それを委員長である私と調整しながらとりまとめるということにしたいが、それでよろしいか。

一　同　　異議なし

委　員　長　　適宜必要な調整をさせていただきとりまとめたいと思う。

最後に事務局から報告事項等をお願いしたい。

事　務　局　　本日はありがとうございました。

今回の意見を事務局でとりまとめ、調整させていただきたいと思う。また、今後の作業については、提言書を教育委長に提出した後、教育委員会として、提言を基に、

第２期の学校施設再生計画を策定する。策定したものについて、来年度、委員に提示し、提言内容について説明したいと考えている。

委員の任期の延長等の事務的な手続は今後行う。

学校教育部長　長期に渡り御議論いただき、今年度最終、委員長一任ということで、修正したものを提言書としてまとめる運びとなった。ありがとうございました。

これを基に次年度計画を作るが、当初は 5 回ということで区切りという話をさせていただいていたが、計画書をみていただき、最終的な判断をいただける場を１回設けたいと思うので、協力して頂けるとありがたい。長期に渡りありがとうございました。

委　員　長　以上で、会議を終了させて頂きます。

委員のみなさまには、長期に渡りご協力いただきありがとうございました。

<u>開会</u>